

【様式：教研院博 13（共通）】

（A4 判縦、3,000 字以内）

博士學位請求論文 審査報告書

論文審査担当者

主査	明星大学	教授	高橋	史朗
委員	明星大学	教授	青木	秀雄
委員	拓殖大学	教授	澁谷	司

申請者氏名 薛 格芳

論文題目 『台湾歴史』教科書形成史研究——ナショナル・ヒストリーの模索」

【論文審査の結果の内容】

研究構成

本博士論文は序章、1～5章、終章で構成されている。序章では、歴史教科書における日中関連記述を巡る論争や対日意識の形成の背景などについて説明した。第1章では、戦前の日本統治時代初期の台湾歴史像をもっとも端的に示す関口隆正著『台湾歴史歌』を研究対象とし、漢詩文と和詩文併記の記述内容について分析した。第2章では、終戦直後の中国国民党支配下の初期に作成された『中等学校暫定用中国歴史課本』を研究対象とし、初めて「中国史」を「本国史」とする本教科書の叙述内容を、終戦前後の概況と歴史教育の状況を踏まえて検討した。第3章では、「中国」を「本国」とする国定歴史教科書の叙述内容について分析し、「台湾歴史」抑圧の意味と変化の様相を明らかにした。第4章では、1990年代に入り、「台湾化」が加速する中で、系統的に台湾の歴史を教える歴史教科書『認識台湾』が誕生した歴史的経緯を、李登輝総統の主張を踏まえて明らかにした。第5章では、『認識台湾』の歴史記述の特色とそれを巡る論争点を分析することによって台湾歴史像の生成過程を解明し、新たな「台湾歴史」教科書誕生の意義について考察した。

本博士論文は、教科書とナショナル・アイデンティティの形成との関係について台湾の政治的変遷と絡めながら考察し、日本統治時代から中国国民党支配下の教科書の叙述内容について詳細に分析した労作である。本論文で最も注目されるのは、李登輝政権が推進した「民主化」（「本土化」）の過程で、いかに「台湾人アイデン

ティティ」が横溢するようになったかを巧みに捉えた点にある。『認識台湾』の分析を通して、「台湾独自の歴史を知るようになり、中国史観から抜け出し、自らの独自の歴史観を構築」するプロセスを明らかにした点は評価できる。また、あまり知られていない関口隆正著『台湾歴史歌』を発掘した功績も大きい。

全体として、後述するように、こなれない語句や論文構成などに若干の不備はあるものの、先行研究を十分に踏まえて、台湾の歴史教科書をオリジナルな視点で分析し、新たな史料も駆使して台湾の歴史教科書形成史研究の新たな地平を切り拓いた学術論文として高く評価できる。

以上により、本研究論文は博士(教育学)の学位を授与するに十分価値あるものと認める。

【試験及び試問の結果の要旨】

口頭試問においては、主に以下の点について論文審査担当者から質問があった。

- ①「去日本化」→「脱日本化」、「華化」→「漢化」など、こなれない語句が散見される。
- ②なぜ日本統治時代の公立学校などでの教科書を取り上げなかったのか、そうしないと一貫性がなく、バランスに欠けるのではないか。
- ③第1章は最終章にもってきて「参考」あるいは「補充資料」とした方が良いのではないか。
- ④教科書検定制度への移行によって、教科書の記述内容にどのような変化が見られるか。
- ⑤『認識台湾』は、「日本の植民統治を美化しているとはいいがたい」と述べている根拠は何か。
- ⑥国立教育政策研究所の研究において、台湾の『国民中小学9年一貫課程綱要』などが日本のカリキュラム研究に対して新たな知見や様々な問題に対する示唆を与えると評価しているのはなぜか。
- ⑦『認識台湾』の「反中」「親日」を巡る論争点は何か。
- ⑧戦後の中国国民党による統治と台湾独自のアイデンティティを巡る深い対立の争点が、新カリキュラムの教科書ではどのように引き継がれたのか。
- ⑨今回の台湾総統選挙に教科書が影響を与えたと思うか。

このような質問に対する申請者の回答は実に的確かつ納得できるもので、論文審査担当者の質問内容や質問意図を十分に理解した上で本研究の課題を整理できていることが明らかになった。また、今後の研究課題として、戦前の公立学校で使用された歴史教科書や教科書検定制度への移行後の教科書の最新動向の分析にも取り組みたいとの回答もあった。

上述した論文審査と口頭試問の結果を慎重に審査した結果、合格と判定した。